

今回は学会(日本考古学協会)での発表についてお伝えします。

## ◇ 日本考古学協会でのポスターセッションについて

平成 28 年 5 月 28 日(土)・29 日(日)、東京学芸大学小金井キャンパスにて開催された日本考古学協会第 82 回総会において、高校生によるポスターセッションが行われました。

我々も、昨年夏の礼文島調査以来進めてきた調査研究をポスターにまとめ、参加しました。ポスターは、SGH の発表でまとめたものをたたき台に、研究発表用ポスター作成のノウハウなどを、インターネットを活用して調べて仕上げました。

- ①目を引くポスターにするため、背景に色をつけること。
- ②見出しは内容を想像できるものとする。
- ③写真をメインとし、文はできる限り削減して写真の理解を助ける内容とすること。

などの点に留意して作成しました。

完成したポスターは、「浜中 2 遺跡に大量の石器が遺されたのはなぜか」というタイトルで、礼文島浜中 2 遺跡で大量の頁岩製剥片が出土した理由を、石器製作実験や使用実験、顕微鏡での観察によって得られたデータから考察した内容をまとめました。

今回作成したポスター

## ◇ ポスターセッションの様子

一般の研究者によるポスターセッションと同じフロアの一角に、高校生用のブースが設定され、関高校含む 6 校 8 グループのポスターが掲示されました。高校生の研究活動に対する関心の高さを示すように、一般研究者によるセッション会場と変わらぬにぎわいをみせていました。



セッション会場は、研究者同士の交流の場という雰囲気でした。我々も、質問されそうなことを想定し、答えられるよう準備して当日を迎えたのですが、予想を超える多くの研究者から、実に様々な意見をいただきました。



ポスターセッション会場の様子

## ◇ 生徒たちの感想

今回のポスターセッションへの参加をとっても楽しみにしていた一方、前日の練習ではたどたどしい説明しかできず、家でもう一度内容を整理してみたけれど、やはり不安が残りました。

当日、会場行きのバスを待っていると、いかにもといった雰囲気の方々が続々と列をなすのを見て、このような専門家の方々が私たちの発表に興味を示してくれるのだろうか、この方々に筋の通った説明をしたり質問に受け答えたりできるのだろうか、と不安が益々大きくなりました。

会場に入り、いよいよ本番を迎えると、予想よりはるかに多くの方が私たちのポスターの前に止まって関心を示してくださいました。

何より驚いたのは、どの方も私たちが高校生だからと言って見下したり気を遣ったりするのではなく、**真剣に耳を傾けて下さったことです。同等な立場で私たちの研究の内容・視点に対して純粋に感服していただいたことが、この研究が意味のあるものなのだという自信につながりました。**今まで、私たちのやっていることは学問のレベルに無いのではないかという気持ちが心のどこかにありましたが、これは考古学の世界で十分通用し得るものなのだと思いますようになりました。

そして、研究をより洗練されたものにするための的確なアドバイスもいただきました。研究タイトルと内容に若干相違がある点、実験における比較対象の設定、仮説の真偽を判断するために次は何を調べるとよいのかといった助言など、大変参考になるものばかりでした。

また、今回の高校生ポスターセッションでは、私たち以外に7団体が参加していましたが、どのポスターも興味がわくものばかりでした。仮説に対して丁寧な検証がされていたり、その検証結果を数値化していたりと、見習いたいと思う点がたくさんありました。

今回、考古学協会で発表したことによって、様々な事を学ぶことができました。

一つ目は、研究の仕方についてです。テーマと結論をしっかりと一致させるべきであること。頁岩と下呂石の割れ方がなぜ違うのか追究すべきであること（私たちの技術不足か石の性質かなど）。出土した剥片の使用痕について確認すべきであること。実体顕微鏡の写真と一致する実物を置くべきであること。近くの船泊遺跡と比較すべきであること。など、多くの課題があることが分かりました。特に、私たちは獣骨のまわりで出土した剥片は使用されたという仮説のもと研究を始めましたが、大きな石器を作ったときに生じたゴミではないかという意見に自分の考えの浅さを痛感しました。

二つ目は他の発表者から学んだことです。研究者のポスターには、アイヌ人の漆塗り椀、西アジアで出土した彩文土器、インカ文明など興味深い研究が多くありました。彩文土器を復元する実験の説明を受けましたが、何年も何年も同じ実験をし、失敗から学び、次の実験につなげる、という話に驚きました。実験は三回に一回成功すればいいほうだということを知り、粘り強く実験を続ける大切さをまなぶことができました。

今回、この学会に参加できたことで、後輩に引き継いでほしいことなどができました。また、多くの専門家の貴重な意見を聞くことができました。もし、大学で考古学などに関われる機会があったら、今回学んだことを生かしたいと思います。

研究者の前で話す経験は今までなかったので、緊張感を持って挑みました。はじめは身体も強張り、相手に伝えたい言葉がまとまらず、上手い説明はできませんでした。しかし、回数を重ねる度にどう言えばよく伝わるかが分かり、わかりやすくなるよう写真を指し示したり、実物を触れさせたりと、自分の中では後半は説明が上手くできたと感じています。

研究者の方々にはさまざまなアドバイスを頂きました。実験に対してのアドバイスも多かったのですが、実験の比較対象の詳しい説明や見せ方など、ポスターの見せ方についてのアドバイスも多く頂けたので、発表する際は改めて考え直していこうと思います。また、自分が疑問に思わなかった観点で「こういう見方もある」と話をされたので、私も気付けるよう知識を深める必要があると感じます。いろんな文献を読み、研究に活かせればと思います。研究をこの先また続けていきたいと思いました。学会の濃い雰囲気を堪能する素晴らしい体験ができました。

# 浜中 2 遺跡に大量の石器が遺されたのはなぜか。

鵜飼真生子・吉田茉由・早川瑞記・高井朗・高井秀樹・木村岳瑠・土屋もえり(岐阜県立関高等学校)

## 研究のきっかけ

私たちは、2015年夏、北海道礼文島で行われた国際共同発掘調査に参加した。そこでは、縄文時代後期の層で、アシカの頭骨などとともに、大量の石器の剥片が出土していた。

なぜ、彼らは大量に石器を生産する必要があったのか。獣骨とともに出土していることから、動物の解体に用いられたのではないかと推測した。



数体の頭骨の周りに、土器や石器が散らばっている。石器には、遺跡の近くで拾える珪質頁岩が用いられている。

## 1. 石器を作ってみる

礼文島の頁岩と岐阜県の下呂石を用いて剥片を製作した。下呂石と比べ、頁岩は大きくて薄い剥片を容易に作る事ができた。



どこを、どんな角度でたたか検討しながら作業した。

## 2. 石器を使ってみる

製作した石器で鶏肉を解体した。

はじめは切れ味が鋭かったが、すぐに切れにくくなった。

一羽の鶏を解体するのに、石器を3~4個必要とした。



使用後の石器には、脂がべったり付いていた



## 3. 剥片の観察

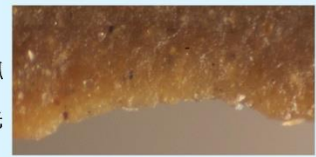
石器の切れ味が落ちた理由を探るため、岐阜県博物館の実体顕微鏡で使用前後の刃部を観察した。

いずれも、写真の幅が約1mm

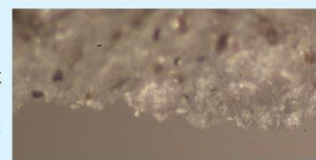
使用前の頁岩。縁辺は、細かくぎざぎざしている。



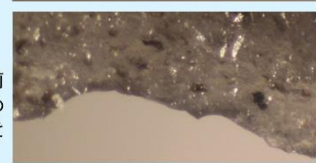
使用後の頁岩。大きな弧状の抉りは刃こぼれ。表面にぬめりけのある光沢が見られる。



使用前の下呂石。縁辺は透けるほど薄い。ガラス質で、きらきらと光沢が見られる。



使用後の下呂石。使用前より黒ずんでいる。ぬめりけのある光沢は表面を覆う脂であろう。



## 石器は使い捨てられた？

- ・頁岩は容易に鋭利な石器を作ることが可能。
- ・細かな刃こぼれと、特に脂の付着により、短時間で切れ味は低下する。

→海獣などの解体のため、即席の石器を大量に作り、大量に消費したのではないかと推測した。